

---

# 旋律

夜哉

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

旋律

### 【Nコード】

N6699C

### 【作者名】

夜哉

### 【あらすじ】

主人公 淡海恭一は唐突に、ある力に目覚めてしまう。それは所謂魔術と言うもの。初めは困惑するばかりであったが、自分の担った運命を知った時、彼の世界は変わった。歩みを進めるうちに、同じ運命を背負った仲間と出会い、彼等は世紀の戦いへと立ち向かって行く。

## episode:0 (前書き)

初の投稿です(^^;; 読みづらい所もあるかと思いますが、この素人をよろしく御願いたします。投稿は不定期になると思います。間隔は……できるだけ空けないように頑張ります。

それでは『旋律』の始まりです。

## episode:0

”精霊に選ばれし者”が四人、そこにはいた。  
静かに、ただ、己と対峙する人型の光をみて。

精霊が四人。そこにはいた。静かに、ただ、己の力を与える者を見ながら。

月の綺麗な夜だった。柔らかに降り注ぐ月明かりは、優しく、包み

込むように、彼等を照らし、野原を照らし。

「……人よ。」

人型の光　　精霊が口を開いた。深く、響く声だった。その声は風に流され、無限の野原を駆けて行った。

「その力が仇となり、世界中から、そなた達の存在を拒否され、その力が仇となり、我が身を滅ぼそうとも、我ら精霊の力を望むか……？」

今度は人が口を開いた。未だ幼さ残るその四つの声はしっかりと重なり夜の闇を切り裂いた。

「望む。」

「なぜ望む。」

精霊は彼等に問うた。

人ははつきりと答えた。

「守ために、死なないために、そしてなにより」

一陣の風が駆けた。風は草原を波立たせ、強く、強く吹いてゆく。

「ただ、前に進むために！」

その声は深夜の草原に木霊した。

## episode : 1 (前書き)

一話です。まだ何も起こりませんね^^・次話で動きます。

## episode : 1

夏の終わりの青い空には、白い雲が流れていく。

日差しが強さは、夏と言うにはもう弱く、秋と言うにはまだ強い。  
そんな空間を駆ける風には、弱いながらも秋の匂いを感じる。

ここは、とある学校の屋上。そこに寝転び、気持ち良さそうに昼寝をしている高校生位の少年がいる。

ミディアムロングの茶髪を風に揺らし、両の腕を頭の後ろで組み、いい夢でも見ているのか、口元には薄く笑みが浮かんでいる。

数分後にはその顔が苦痛に歪むのを彼は知る由もない。

彼の名前は淡海 恭一。現高校二年生だ。校内で彼はそこまで優秀とは言えない。しかし、化学、数学、体育だけは抜けていた。彼曰わく

「他の科目はだりい。ってか、極めたいやつだけやればオツケーっしょ」

らしい。

そんな彼だが、人柄から友人は多かった。なぜか友人には頭の良いのが多く、生活ではあまり苦労していない。

さて、先程言った“数分”が来たようだ。屋上の扉が静かに開き、一組の恭一と同じぐらいと思われる男女が足を忍ばせて入って来る。二人は恭一の側まで来ると、顔を見合わせてニヤリと笑い、そして何を思ったのか頷いた。

突然、少女は上へと跳躍した。

空中で体を地面と平行に倒す。右肘を鋭角に曲げ、右の拳の上に左の掌を添える。やがて跳躍が頂点に達すると彼女の体はフリー・フォール。その落下の勢いとともに、彼女の肘は鮮やかに、恭一の腹に突き刺さった。

「うつ、」はっ……………！……………いつてえー！！！」

苦痛の叫びが、昼休みの喧騒が包む学校に響き渡った。



「……あのさ、もうちょつと優しい起こし方は無いわけ？」

10分ほど続いていた悶絶から立ち直り、恭一は肘打ちをまともに食らった腹を押さえながら、ヨロヨロと体を起こした。

「あら、いつものことでしょ？ 力はセーブしたから大丈夫だと思っただけど？」

肘打ちの張本人である少女、風山 雪は素知らぬ顔で答えた。

雪は恭一と同学年で、空手部に所属しており、部活の次期主将とまで言われている実力者だ。そんな人間にあんな攻撃を、しかもクリーンに当てられて無事である筈がない。

「そうそう。こんなんでガタガタ言ったら世の中生きていけませんよ、恭一君。」

雪と一緒に来た男、森下 仁はこう言った。

普段はもつと普通に喋るが調子に乗ると、さっきのように喋る。

「じゃあ、あなたにも叩き込んであげましょうか？」

「い、いえ。え、遠慮しておきます……。」

「残念ね。また今度やってあげるわ。」

さほど残念ではなさそうに雪は答えた。

（やっぱり立場違いよけのバカップル。）と、危うく口に出しそうになって、恭一は慌てて言葉を飲み込んだ。

雪と仁は校内でも有名な“バカップル”である。

「今度っていつやるつもりだよ!？」

「そうねー、次一緒に寝た時かな？」

「寝た時ってお前…こないだもそんな事言って結局泣きながら許しを請いて来たのは誰だっけ？」

「あつ、あああれは、だって、そ、その……」

（ホントにこいつら馬鹿だわ。それに……）恭一は自分が二人より成績が下なのを棚に上げて、そんな事を思った。

（……そろそろ止めないと大変な事になるな。）そして雪と仁の世<sup>バカップル</sup>界に入り込んだ。

「で、人の安眠を破壊しに来たんだからなんか用があるんだろ？」

「『俺の家の掃除を手伝え』って言ったのはあんたでしょうよ？」

先程の言い合いで顔を真っ赤にしながら雪が答えた。そして、

「家族みんないなくなったからって掃除サボるなよな。」  
と、仁が続けた。

そう、恭一には家族がいた。

父、母、兄、そして恭一。一家は幸せに暮らしていた。しかし、恭一がまだ小学4年、兄は中学3年生の頃に、両親が死んだ。

警察からは通り魔と聞かされた。その話はしばらく近所を騒がせ、

恭一と兄は好奇心の目を向けられる事になった。

幸い親の貯えは多くあったので、生活に苦勞することはなかった。

そして、兄がすっかりしていたので恭一の心は次第に癒された……はずだった。

その兄は高校を出ると同時にどこかへと姿を消した。恭一が中学1年の時であった。

それから恭一は全くといっていいほどしゃべらなくなった。いつも何もせず、ただ焦点のあっていない目をもつて過ごしていた。

そして中学2年の時のクラス替え。雪と仁に出会った。

二人はしつこいぐらいに恭一に付きまとった。後々、二人は『喋らせたら面白そうだったから』と理由づけをしたらしい。次第に恭一は心をとirmどし、今のようになった。

その時の話はまた別の時にしよう。

だから恭一と彼らの間では、重い話や過去の傷でさえも笑い話になつてしまう。それほどに信頼関係がそこにはあった。

さて、話をもどそう。

「やる気になった時にはもうぐちゃぐちゃだったんだよ！」  
そして帰宅後に、恭一は大きく人生を変える事になる。

「……」

家にかかるなり雪は絶句した。

学校からの帰り道。恭一、雪、仁の三人は掃除に必要になると思われる道具をいくつか買って恭一の家に向かった。

恭一の家は一般的な二階建て。小さな庭があり、そこにはさらに小さな蔵がある。その蔵の中に家族との思い出の品が入っている。

家の方の掃除は特に問題無く終わった。強いて言えばサボっていた仁の頭に、雪のシャイニング・ウィザードが炸裂したぐらいだった。ちなみに今、仁の右側頭部はかなり腫れ上がっている。

やがて掃除は例の蔵に取りかかる。

中から出てくるのは写真、写真、写真。ただ、写真だけ。なんだかんだ言っても恭一の心の傷は完璧に癒えた訳ではない。

「お前さ、この写真達みんな投げ入れただろ。」

仁は呆れたように恭一に尋ねた。

「写真はぐちゃぐちゃだし、写真自体は折れ曲がってるし。」

「あのな、当時の俺が小綺麗にしまえたと思うか？」

恭一はわかってるだろ？と付け足した。

「まあそれもそうか。」

などと言いながら、仁は中に入っては荷物を取り出す、という単純作業を黙々と続けている。

そんな彼に感謝しながら、もう一度蔵の中を見渡した。

外から見た限りではそこまで大きく見えなかったが、中から見るとそれなりの広さがある。

2 m以上あるかと思われる埃がたまった灰色の天井、なかなか丈夫そうな白い壁。

畳六畳程の床には写真がばらまかれていて、それは隅の方までひろがり、その上には銀色の指輪がある。

（ん？……指輪？）

初めは誰かお客さんの忘れ物かと思ったが、まず来客の記憶がない。

かと言って両親がの物でもなさそうだ。兄はアクセサリーには興味はなさそうだった。

（……じゃあ、誰のだ？）

「いいや、貰っちゃえ！」

そして恭一は銀の指輪を眺めた。飾りや彫つてある所もなく、角張った所も無い。ただの指輪だ。

恭一は自然な動作で指輪を右手の中指へと導いた。

ガチャ。

体の中の扉が、鍵が開いた。

ボコッ。

体の底から何かが湧き出る。

世界は、動き出す

。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6699c/>

---

旋律

2010年10月10日01時26分発行